

新出本『袋法師絵巻』について

はじめに

『袋法師絵巻』（別名『太秦の草紙』）は、十四世紀頃に制作されたと考えられる絵巻である。原本については、滝沢馬琴の『羈旅漫録』に、「太秦の草紙は、室町家の時の戯作春画なり。原本は今出川相国寺にありといふ。そのうつし一卷、橋本経亮かたより、もとめよとておこしたりけるが、文面首尾せざりければかへすとてよめる」^①とあり、原本が相国寺にあったとされる記述が見える。また、東京国立博物館本の奥書には、原本が天保年間の火災によって焼失したことが記されている。^②いずれにしても原本は逸しており、現存伝本は近世の模本が主である。

また本作品は、『小柴垣草紙』や『稚児之草子』と並ぶ、中世の三大性愛絵巻の一つとして挙げられる作品である。大胆な性描写が描かれるため、近世の春画・艷本の前史として、好事家や美術史の分野から注目されてはいたが、^③文学研究の立場からは、お伽草子の一作品として認知されていたものの、^④研究の俎上に載せられる機会はほとんどなかった。

しかしこの十年ほどの間に、拙稿や井黒佳穂子氏の論考^⑤によって本格的な研究の基礎構築が試みられ、現存伝本の調査・確認、検討、整理が進められてきた。本稿は、そうした既知の伝本とは異なる内容を持つ架蔵本について新たに紹介するものであるが、その前に、これまでに明らかにになっていた諸本の様相について、おさえておきたい。

吉橋 さやか

一、諸本をめぐる問題

『筆の御霊』における記述

『袋法師絵巻』の諸本については、古くは江戸時代後期の有職家である田沼善一の『筆の御霊』に、次のような記述がある。^⑥

○袋法師画詞のこと

袋ほうし画詞、世に二々種あり。一くさは後の世の物にして、詞も見るに足らず。今一は則こゝに引る物にして、いと面白き所もあり。さて古き方は、詞みな画の前にありて、大かたの絵詞と姿おなじく、只末の段のみ、詞を絵の上にちらし書り。新き方は詞を、絵の所にちらし書る所おほかり。又古き方には、末に傘かたげて行ところなし。新き方には袋をかき持て行段なし。古き方はそのさまおもふに、大凡室町將軍のころの物なり。

これによると、本作品には「古き方」と「新き方」の二種類があったことがうかがえ、前者は詞書が絵の前に書かれ、最後の段だけ絵の上に詞が書かれており、袋を担いで持つて行く場面があるという。また後者は、詞と絵が混在している部分が多く、最後の段には傘を担いで行く場面があるという。

その上で現存伝本を確認すると、これまでの拙稿や井黒氏の論^⑦によって明らかにされてきた現存伝本は、次の十九本である。

これまで明らかにされてきた写本

- ・サントリー美術館本…絵巻一軸
- ・ミカエル・フォーニッツ・コレクション本…絵巻一軸
- ・宮内庁書陵部本…絵巻一軸
- ・静嘉堂文庫本…写本一冊
- ・久保家・多賀神社本…絵巻一軸
- ・神宮文庫本…絵巻一軸（絵の抄出本）
- ・大分県立図書館本…写本一冊
- ・実践女子大本…写本一冊
- ・東京国立博物館本…絵巻一軸
- ・蓬左文庫本…写本一冊
- ・京都女子大本…写本一冊
- ・国立国会図書館本…絵巻一軸
- ・板坂則子氏蔵・A本…絵巻一軸
- ・ B本…絵巻一軸
- ・ C本…絵巻一軸
- ・国際日本文化研究センター本…絵巻一軸
- ・早稲田大学図書館・A本（九曜文庫本）…写本一冊
- ・早稲田大学図書館・B本…写本一冊
- ・ノートルダム清心女子大学附属図書館本…写本一冊

そしてこれら十九本における物語の内容は、次のようなものである。

【物語の梗概¹¹⁾】

神詣での帰り、川を渡れずに立ち往生する三人の女の前に、「むくつけき」法師が舟に乗って現れ、女たちを招き寄せる。女たちは喜んで

舟に乗り込むが、法師は川の中島に舟を着けると、情交を迫る。女たちは仕方なく代わる代わる法師と情交を結ぶと、その後法師は、女たちを屋敷まで送り届けた。

数日後、法師は女たちの屋敷を再訪。人目を気にした女は、法師を袋に入れて隠したが、夜になると、袋から這い出た法師と情交に耽るのであった。

ところが、夜が明けても法師は帰らない。持て余した女は法師を再び袋に入れて隠し、主の尼御前に相談する。すると尼御前は、その法師を預かって出て行かせようと請け合い、袋に入った法師を預かる。その後、（法師が入った）袋がどうなったかは、誰も知らないのであった。

このように、詞書では、袋のその後を誰も知らない、という終わり方になっているのだが、絵の方では、袋を預かった尼御前が、袋の中の法師と情交に耽っている様子が描かれており、袋を預かったその後の顛末（尼御前もまた、法師との情交に耽ったこと）を絵で語らせるといふ仕立てになっている。なお諸本によつては、物語後半部分に、法師を借りたという隣の局の尼からの要請に応え、法師が袋入りで貸し出されるといふ展開を持つものがある¹²⁾。

さて、これまで明らかにされてきた十九本の現存伝本の概要を確認したが、ここで一つ問題なのは、十九本の伝本のうち、物語の最後に傘を担いで歩く法師が描かれる場面をもつものが、一本もないという点である¹²⁾。では、そうした伝本がなかったのかというと、そうではない。というのは、本作品の活字本には、傘を担いで帰る法師の場面が確認できるからである。

活字本について

昭和から平成にかけて刊行された活字本⁽¹³⁾を確認すると、いずれも、さまざまな女たちの相手をして精根尽き果てた法師が、女たちの屋敷を追い出され、傘を担いで寺へと帰っていくという結末で物語が終わっている。また活字本では、物語中盤、情事に興奮した女たち三人が、張形で性戯に耽る場面が存在しているのだが、これもまた先の十九本の伝本にはない場面である。

では、活字本が底本とした伝本は何か。その確認が必要なのはいうまでもない。ところがいずれの活字本も、依拠した伝本についての情報を十分に明記していない⁽¹⁴⁾。また、国書総目録をはじめとした各種目録類や事典類にも、傘を持った法師が屋敷を追い出されて寺へと帰る結末を持った写本についての情報はなく、その所在や詳細については、長らく未詳であった⁽¹⁵⁾。

架蔵本紹介の意義

このように、活字本と同じ内容を持ち、『筆の御霊』で「新き方」とされている種類の写本が存在すると見られながらも、その所在や実態がつかめぬまま、諸本の総体把握の停滞を余儀なくされていた。そのため、そのような伝本の搜索・発見とその公開・共有が、近年の『袋法師絵巻』研究の急務の課題であった。

そうした状況の中で、その課題に応え得る伝本が、この度新たに見出され、架蔵本となるに至った。『袋法師絵巻』諸本の総体把握を可能にする、重要な一本である。

よって本稿では、その架蔵本について紹介する。

これにより、活字本の底本となった伝本の姿が広く確認・共有されるとき、当作品の研究基盤の構築が大きく前進することが期待できよう。

ただし紙幅の都合上、本稿では、書誌と簡単な解題、一部の絵、詞書の翻刻を紹介するにとどめ、異同の詳細や新たな問題の検討などは、別稿に委ねることとした。

二、架蔵本『袋法師絵巻』について

【書誌】

作品名	袋法師絵巻
外題	なし（題簽あり）
内題	なし
表紙	紺地に金の鶴模様
見返し	金彩の松葉模様のもと、浅黄色・金・銀箔ちらしのものが貼り継がれている。
料紙	楮紙
絵	あり（淡彩）
用字	本文は漢字・平仮名・片仮名混じり。朱で見せ消ちあり。
蔵書印	なし
書写者	未詳
書写年時	江戸時代後期
箱など	木箱あり。蓋の表面に「花鳥帖」と墨書きあり。蓋の裏面に「有美廼子能弥八十都々岐生繼無／道序此道凡亦難思曾季鷹」と墨書きあり。
現存状態	表紙に疲れ・破れあり。裏打ち、紐の付け替えなどの補修あり。
形態・数量	卷子本・一卷一軸。
寸法	天地二七・五糎、全長一三五四・〇糎。

【解題】

では、架蔵本の大きな特徴について、以下のa～cに記す。

a) 二つの場面について

当伝本は、物語の中盤に、三人の女が張形を用いて性戯に耽る場面がある。また物語の最後は、精根尽き果てた法師が女たちに見放され、山寺へ返されるという内容で終わる(図参照)。これらの内容は活字本と共通するものだが、これまで明らかにされてきた十九本の写本には見られない内容である。各々の活字本が底本として参照したものは不明ながら、当伝本がそれらと同様の特徴を持つことがわかる。

よって、写本と活字本との間に生じていた内容上の隔たりを埋め得る伝本、すなわち両者をつなぐ貴重な一本として、当伝本を位置づけることができよう。『袋法師絵巻』諸本における展開のあり様を把握する上で、当伝本が重要な伝本であることは、間違いない。

b) 諸本と異なる絵の描かれ方について

諸本と共通する場面の絵において、他の伝本とは大きく異なる描かれ方をしているのは、以下の二点である。

一つは、法師が女たちの屋敷を再訪した場面である。諸本では、この段階で法師はまだ袋の中には入っておらず、袋の下に隠されている。しかし架蔵本では、既に袋の中に法師が入っている。さらに架蔵本では、袋に隠れた法師がいる隣の部屋に、話をする女たちが描かれているが、他の伝本では、法師と女たちは同室に存在しており、法師を隠した袋のすぐ前で女たちが話す様子が描かれている。

もう一つは、情交場面の描かれ方である。諸本では、二～三つの絵を大きな一まとまりとして描く場合が多いが、架蔵本では、一つ一つの絵を、それぞれ詞書と対応する箇所に分けて配置している。また各情交場面を区切るように、衝立や屏風などが描き込まれている。

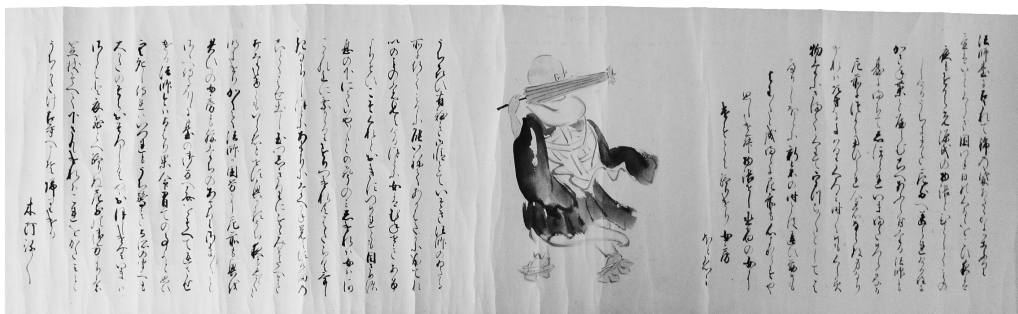
以上が大きな当伝本の絵の表現上の特徴だが、異同の詳細や検討については、別の機会に委ねたい。

c) 箱の蓋の裏書きについて

本絵巻が収められていた木箱の蓋裏の墨書に、「季鷹」の名が確認できる。季鷹は、江戸時代中～後期頃の賀茂季鷹のことであると思われるが、京都上賀茂神社の祠官であるとともに、国学者、歌人、狂歌師でもあった。また季鷹は、花月葉翁亀齡が天保七年(一八三六年)に京から江戸への手土産として作った春画影絵『華月帖』の序などを書いている。よって、同じく性愛を描いた『袋法師絵巻』に季鷹が関心を寄せ、当伝本に何らかの形で関与した可能性も否定できないだろう。その関与の仕方については不明だが、今後検討すべき興味深い点である。

他にも、当伝本について言及すべき特徴はあるが、ここでは以上三点の大きな特徴を紹介するに留め、簡単な解題としたい。

図 最後の場面



【翻刻】

— 凡例 —

翻刻に際して、以下のように処置した。

- ・ 詞書は追い込みとし、絵巻における改行箇所は「」で示した。
- ・ 旧字体は新字体に改めた。
- ・ 「ハ」は平仮名「は」で記した。
- ・ 見せ消ちや補入、その他注記が必要な箇所は、注で記した。
- ・ 絵の入る箇所は★印を付し、順に①～⑩の番号を付した。また、それぞれの絵の説明を（ ）内に私意で簡単に記した。
- ・ ⑥⑨の絵の前後の詞書は連続しており、詞書の下に絵が描かれているため、その部分の絵の挿入箇所については、他の部分の絵よりも段下げにして示した。

人のものいひさかなき世のならひとてかゝること／さへ書つとふれは色
ふかき女のうき名をくた／ける永き世までのためしとやなりなむされは
／いつれの御所のおみなともしらす三人うちつれ／て神まふての帰るさ
都の外の遠きやま路を／たとるにさるへき案内もなくてわけまよふに／
笹原の露も所せきまで袖にみたれそよく／かせのひ、きも何となふこゝ
ろすこいかなる／狐やうのものに見いれてんやとわひしうとある／河
原にたとり出にけるかたつ波しろうさはきて／さかまく水のいきほひ見
るめもおそろしく岸の／辺につとひよりそいつ、渡守やあると待やす／
らふにいとむくつけき法師すみの衣甲斐／しく／きなし舟をさしよせ
はやなどと思ふ気色見えて／こなたのかたをまねきけるをみなたち見給ひ
こは／神仏の道にまとえるをあわれみ給ふにやといと／ありかたぐうれ
しくてひとり舟にとく乗ぬふ／たりのをみなもおくれしといそくに法
師うちゑみ／つ、棹をさしをきてふりかへりよしめきたる／有さまこゝ

ろにくゝそ侍るそかし三たりのをみ／なたちは独の法師をけふや御仏と
たのみてむかへ／の岸へ送りとゝけ給へとひたすらに頼みしに／うちう
なつきつゝ、沖中にさしいたしてはな／れたる小嶋に寄て舟をつなぎおき
て我身は／けさ衣ほろ／とぬき捨けるかやかて舟よりおり／たちいつ
しかうちねふりゐて舟出すへき気色も／見えねは女とももてあつかひて
ざりとて有へき／事ならねはめのとにていとうとからぬくしける／かと
かくこしらへ見申さむとおもひめくらしき／ま／と言の葉をこそ／つ
くしける／

★絵①（法師の舟に乗りこむ女たち。一人は既に乗っており、一人は
舟に手をかけている。もう一人は衣を頭にかけて舟の方へ向
かっている）

偕しも何事をか／おもひ給ふらむや／いかなる風情なり／とも／おほさ
むまゝまかせ／奉らむなど／いゝ侍れは／兒うちゑみて／いとうれしけ
に／中にちと／おとなしく／

★絵②（女たちの乗った舟を進める法師。一人の女が法師の手から棹
を取り上げようとしている）

みめもよく／このもしけなるに／指さしてあれ／をと／いふけしきを／
みせければ今は／いかにいふとも／甲斐あらしと／心をゆるしてこそ／
のそみはいかに／あるへきと／いゝあはせて／

★絵③（川の中島の場面。右奥には二人の女がおり、一人はこちらを
向き、もう一人は後ろを向いて首を垂れている。左手前には、
笑みをたたえながら一人の女を指さす法師がいる）

ふたりは／うす衣／ひろけて／たちかくし／つゝ／ひとりをあつけ／侍
れは／

★絵④（法師と一人目の女の情交場面。法師の後ろには墨衣が脱ぎ捨
ててある。右上には二人の女が衣をひろげて立っている）

ゑしやくもなく／おしたふし／帯をときくねるゐの／下ひもを己かかし／らにうち／まとひ／

★絵⑤（法師と女の情交場面。法師が女の片足を持ち上げている。法師は全裸で、女の上半身は衣で覆われている）

いとこのもし／けにそまきてけり／女性こゝゑにはち／らひて／のたまふはをかしき／法師かな絵に／かける達磨に／似たり／其大師は九年／面壁とやらむ／座禅し給ひ／腰より下／くされし／とかや／

★絵⑥（法師と女の情交場面。衣の上で全裸で抱き合う法師と女）

そこにも／くさらかし／給はむや／また三つよつの／年おとりと／をほしきか／いとほ／かなる／

★絵⑦（法師が御簾をくぐって女たちの屋敷へ入る。御簾のところに一人の女がいる。部屋の中には袋の中に入った法師と、それを隣室から見る女が一人描かれている。そしてその隣室では女が三人描かれ、何か話している様子）

ゆひをさせは是ほどの事になりぬるうへはとゆる／してけり恋しきものに袖をしきつゝとこそ／聞侍りしにもつたひなくもけさ衣も打敷て／はしめのことく／まきてけり／

★絵⑧（部屋の中で情交に耽る法師と女。法師は女の顔を抱き寄せている）

またはしめかしらをふりたる女にゆひをさせは／是はとかくいふにおよはずとてうちはたけたれば／法師すこしもひるますあんなひもなく／ねまはせはおみなは元より待わたることなれば／はせたすいきおひは中嶋の瀬よりもはやく法／師もうくはかりに成ければぬき手¹⁸をやきり／なむ一人ならずふたり三たりまで思ひのまゝにまき／ければ皆々舟にうちのせて向ひの岸に着侍りぬ／日も暮かゝりければ道のほとおそれある

よしなと／言つゝいとふ心侍りければ此法師都のかたへ送りてそ／おもむきける瀬立にし所に帰り入ぬ送りの僧つ／ゐしのかたはらにたゝすみ居たるほとにしはらく有／て乳母の女出て有かたくも是まで送り給ひぬ／此世ひとつならぬことく浅からす思ひ侍る山寺法師／の御身にはおのつから申させ給ふへき事なとあらむ／時は是まで見えしのはせ給へわらは心得申入へき／よしなといゝければ法師悦ひうちうなつき神／詣の女帰るさの事あらましこそ御物語申給ふ／けれとしか／の事は元より申へき道ならねは／台にはしろしめさむやうもなし法師か事／よき幸とおほし召今宵はむねなむいためり／早くいねはやと薙やり戸を立おろしうち／ふさせ給ふ人静りかの法師袋の下よりはい／出て御かたはらによりふしぬ台にもいた打も／いねさせ給はすこは浅ましく心うきわさかな／おのつから人も聞なは浮名やもれむとひた／すらにわひ給へは／たゝいらへもせず／ふところへ手を／さし入きぬの／前ひきまくり／かきさくりけ／れはとけとろ／めきて股の／うち尻のかた／さまふのり／

★絵⑨（法師と女の情交。法師は女の股に顎を押しつけている）

をこほしかけ／たるやうにて／このもしさ／いはんかたなし／左りの手にて／御くしをかき／よせ御口を／すは／とすへは／御顔は涙にぬれけるにや／ひや／として御口のうちはあたゝか／なりければ心ほれ／と成ける／台にもいそかせ給ふ御気色見え侍る／ほとに玉門の上をおしぬくひ髭をそりて／三日はかり過たる頬にてかの口にさしあてゝ／口をすうやうにし侍りければ鼻の上眉のあた／りへさつとはせ出させ給ふ程にはなの穴へ入ひた／としはふきし侍りければおします／とこそ／のたまひけるとなり／

★絵⑩（法師と女の情交場面。ともに全裸で、女は法師の腰に手を回している）

台にもいたきつかせ給ひけるほとに法師もおし／か、め奉り思ふまゝにこね廻しけるされは御枕も／さたまらず更行かねにくたかけの鳥ともろ音に／御声も隣の局まできこゑなむ法師うたてや／おもひけん衣の袖を引そはめおほひけるとなむ／恋を奪はるゝとやらむ中島にてよき事したる／女はら台の休ませ給ふ程近きにいね侍りしに／御心よけに深窓にて御むすからせ給ふ御声をき／きて三人の女むねうちさわきおきもせず寝も／せて夜半をあかしてとやらんしきりに御うら山／敷なりて元我々か恋なる上御秘藏袋御返し／あれなと、さゝ、やき／ける程に乳母の女／

★絵⑪ (三人の女が性戯に耽つているところ。二人の女が、赤い紐に括り付けた張形を首から下げている)

申けるを／よき事さ／へになを罪／深き御事也／もてる調度の／中に御用の／ものとしてやむことなき／すかたやうのもの候へは／先今宵は是にてましなひ給へ／明ての御沙汰とてくたんの物を取いたし／侍りつゝ、三人思ひのまゝにそはしめける／

爰に西の台の御かたには御従弟にておはせし松若／の尼前とて廿にみつばかりも過行給ふいとる／はしき御かたおはします頭中将とやらむ色この／みのみち深くいとやむことなき人の妻にて／侍りしかうき世の中のならひとて此中将世を／はやう去給ひければよるのふすまも懐広くひた／すら夫の後世の事のみふかくいとなみかさりを／おろし墨染の身とは成給へとも去るものは／日々にうとしとやらむいろある公達を見て／うせにし人の俤を恋心に煩惱の数珠をつま／くりさひしさの余りにふるき文を取出して／いなにはあらぬいな舟のさそふ水あらはいな／むとそ思ふと歌によみかゝり給ふ折ふし直／居しける女房の物語りに台の御方にごそ／御秘藏ふくろとてめつらかなる御なくさみ入／間の庄司か娘のいにしへつまもこもれりと武／藏野に業平をかくせしも今の御たはむれ⁽¹⁹⁾

似たる／

★絵⑫ (尼と女が話しているところ。尼は頬杖をついて微笑みながらこちらを向いて座っている。衝立を隔てた隣には、袋に入った法師と情交に及ぶ尼が描かれる。全裸の尼が、法師の入った袋の上に乗り、袋の口から法師の男根のみを取り出している)

よしなとさゝやくを／聞しめし給ふに御むね轟き／しのふすりおもひみたれ女は人めの／関にさへられうへにはつゝ、めとしれぬは／かのまよひと文こま／と書給ひて／御秘藏ふくろしはしのうちかり／給ひたきよし言おくり／たまへは台おとろき何として／もれけるはと恥らひ／給ひしか／

★絵⑬ (尼と法師の情交。法師は袋に入つたままで尼を抱き寄せている) 我のみのしなむもいかゝやと／おほしけん返す／もひとにもらし給ふな／とて彼袋を長もちやうの物にいれ錠をなん／おろし鍵を封してそ贈ける去程に尼前は／そゝろに悦ひ給ひ台より送れる調度に寄／添日くらしの月待ほとに御ところ蔵夜にいり／ければかの袋かき出しうちつけの恋に御すかたみへ／ゑんも羞かしくやおほし給むむく／とうこ／めきけるふくろの口より例のものさし出せはさい／わめと主従うへよりおしふせさせ給ふ法師もさ／すかはちらいてふくろを出すしておしかへして／たてまつるおもふさまにまきてけり／

★絵⑭ (法師、袋から出て尼と交わる)

陰陽の歌二つかひ過ければふくろの中より／法師も顕れいて互におもはゆけにておほけ／なくまもりゐたりしかほうしまたおしふせ／奉りければ尼前三とせこなた御おもひ出にや／わき出る水に御床のうへもぬめりとろめき／御顔はあか／と御いきのせわしなさ御まな／しりはへもしなりにそ成侍るいかなる法師な／れはかくはまくもすゝめ給ふとぞゝりなきに／泣出したまふそことはりとも／またあさまし

★絵⑮ (法師と女が裸で横になっている。女は法師の体に手を回し、片足は法師の脚の上にのせ、ぐったりする法師を誘っている様子)

法師台に召されて錦の袋あた、たかにかふり／昼はいとくらき闇門に日のくる、をこひ夜は／夜もすから光源氏の物語とひとしくもの／しけるうちにまた尼前へ送られける程に／かきねなとやらむこへあふら付たる法師も／台にまかりてしほられいままためつらかなる／尼前につよく用ひられ金石ならぬ身なり／ければ次第によりくるみ時々めくらめ／物たにさまでくわてうつら／／としては／へりしほとに新参の時とは違ひ勤めも／よわ／／と成ま、に尼前も心よからすや／思しけむ物語せし直居の女に／遣すとて給りけり女房／ほ、ゑみ／

★絵⑯ (傘を肩にかけ、墨衣姿で歩く法師)

うち喜び有難き御情とていそき法師のゐたる／所に行てみるに能いねてあかはたかに成てれ／いのものも見えけるほとに女はむねせきあけ／よりそひこそくれとおきすつめれとも目さめす／息の下にていや／／との声のみしければ女はあ／こかれ上に乗か、りすりつけれ共はたらくけし／きなかりしほとにあまりにたへかね覚えす水漏の／ことくはせ出し玉門しきりにす、みもたへまた／打た、けともいらゑもせず興かるうち夜もしら／／と／明にけりかくて法師か困勞に尼前も興を／失ひかの女房も腹たちのあまりさま／／と／さ、へ待るほとに台の御方へ文をそへて返させ／ける法師今はやはり果命有ての事よと思ひ／空死し侍れはいつれもうち驚きよその聞へも／大かたのそらおそろしくやおほしけむいまは／さらはと衣ひとへ給りぬ尼前の御方よりも／笠杖そへて下されければこれをかたみとうちかたけ古寺へこそ帰りける／木阿弥／／

【注】

- (1) 滝沢馬琴『羈旅漫録』の本文は、『日本随筆大成』第一期第一卷(吉川弘文館 一九七五年)より引用。
- (2) 拙稿「東京国立博物館所蔵『袋法師絵巻』について」(『立教大学大学院日本文学論叢』第十一号 二〇一一年八月)
- (3) 福田和彦『艶色説話絵巻』(浮世絵グラフィック六 KKベストセラーズ 一九九二年)に、一部の伝本の絵や本文、注があるほか、橋本治「科学するもの『小柴垣草子絵巻』」(『芸術新潮』ひらがな日本美術史連載その三十一 一九九六年五月号)、林美一・リチャード・レイン共同監修『秘画絵巻【小柴垣草子】』(定本・浮世絵春画名品集成十七 河出書房新社 一九九七年)、早川聞多「袋法師絵詞」(白倉敬彦編『別冊太陽 肉筆春画』平凡社 二〇〇九年六月)などで本作品が紹介されてきた。
- (4) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版 二〇〇二年)では、「袋法師絵詞」として立項され、徳田氏による解説が収められている。
- (5) 拙稿「東京国立博物館所蔵『袋法師絵巻』について」(『立教大学大学院日本文学論叢』第十一号 二〇一一年八月)、拙稿「『袋法師絵巻』の諸本展開」(『立教大学日本文学』第一〇七号 二〇一二年一月)、拙稿「『袋法師絵巻』の袋の用法と多義性」(『立教大学日本文学』第一〇八号 二〇一二年七月)、拙稿「近世における『袋法師絵巻』の受容」(『立教大学日本文学』第一一一号 二〇一四年一月)。
- (6) 井黒佳穂子「『袋法師絵巻』伝本の変遷について」(『浮世絵芸術』一一七号 国際浮世絵学会 二〇一六年一月)
- (7) 田沼善一『筆の御霊』の本文は、『日本随筆大成』第一期第十九卷(吉川弘文館 一九七六年)より引用。
- (8) 注5掲載論文参照。

(9) 注6掲載論文参照。

(10) 物語の梗概は私意でまとめた。

(11) 現存伝本の様相については、前掲注5の拙稿「『袋法師絵巻』の諸本展開」(『立教大学日本文学』第一〇七号 二〇一二年一月)や、注6の井黒氏の論を参照のこと。

(12) 井黒氏も注6掲載論文の中で、法師が傘を担げて歩く場面のことについて触れ、「こうした展開を辿る伝本は一つもなかった」と報告している。

(13) 活字本には、以下のようなものがある。

- ・『袋法師詞書 全篇』(稀覯文献研究会報告 第一冊 芋小屋山房 一九四七年)。解題と、複数の伝本を統合した校訂本文を掲載。
- ・斎藤昌三訳『秘められたる古典 はるさめごろも』(風俗文献社 一九五一年)所収「袋法師詞書」。参考原文の一部、解題、現代語訳を掲載。復刻版に、風俗資料研究会編『秘められたる古典名作全集 第二巻 はるさめごろも』(富士出版 一九九七年)がある。
- ・新津富美男『真実伊勢物語』(紫書房 一九五二年)所収「袋法師絵詞」。詞書と解題を掲載。
- ・光明寺三郎『真実伊勢物語』(三崎書房 一九七〇年)所収「袋法師絵詞」。現代語訳を掲載。
- ・青木信光編『好色の女』第七卷(文化文政発禁文庫 図書出版美学館 一九八三年)所収「袋法師絵詞」。詞書と絵一図を掲載。
- ・福田和彦『艶色説話絵巻』(浮世絵グラフィック六 KKベストセラーズ 一九九二年)所収「袋法師絵詞」。解題、詞書、注、一部の伝本の絵を掲載。

(14) 注13に挙げた活字本における掲載本文は、複数の伝本を参照した校訂本文もあれば、ある一伝本を底本とした翻刻や、現代語訳だけ

のものもある。いずれにしても、参照した原文について多少言及しているものがあるだけで、底本を明確に記している活字本はない。

(15) 徳田和夫編『お伽草子事典』の解説に記されている物語の梗概も、活字本と同内容であるが、その内容を持つ伝本について明記されていない。

(16) 諸本は「せ」。

(17) 原文では「こ」の後に「れ」の字が書かれているが、朱で見せ消ちあり。

(18) 原文では「ぬ」の後に「れ」の字が書かれているが、朱で見せ消ちあり。

(19) 片仮名「ニ」は、小文字での補入。

(よしはし さやか 立教大学兼任講師・日本学研究所研究員)